

2024年度 広島市立大学 一般選抜（前期日程） 試験問題  
（国際学部）

# 総合問題

（120分）

2024年2月25日

## 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は9ページあります。  
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合には、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 解答用紙は5枚です。解答はすべて解答用紙の所定の場所に記入しなさい。
- 4 解答用紙とは別に、下書用紙が2枚あります。必要に応じて自由に使用しなさい。
- 5 受験番号は、すべての解答用紙の所定の欄（2か所）に必ず記入しなさい。
- 6 配付した解答用紙は、試験終了後にすべて回収します。
- 7 試験終了後、問題冊子、下書用紙は持ち帰りなさい。

このページは空白である。

## 第1問

以下の文章は、石原真衣の「先住民という記号－日本のダイバーシティ推進における課題と展望」からの抜粋である。文章をよく読んであとの問いに答えなさい。

世界中を席卷する空前の (a) ダイバーシティ とSDGs ブームは先住民にとって権利回復の後押しになるだろうか。近代文明やいきついた資本制のもとでグローバル化においてモノや情報のみならず人間が容易に移動できるようになり、地球全体が環境危機を迎えている。われわれがこれまで経験したことがなかった新型コロナウイルス感染の世界的拡大による未曾有の状況や、ロシア・ウクライナ戦争を取り巻く喧噪は、ある意味では人類が辿ってきた暴力的世界の帰結でもある。グレタ・トゥーンベリさんが、トランプ元大統領をはじめとする大人たちの神経を逆撫でした「あなたたちが話しているのは、お金のことと、経済発展がいつまでも続くというおとぎ話ばかり。恥ずかしくないんでしょうか！」という発言も記憶に新しい。このような時代のなか、先住民の伝統知や暮らしは見直されはじめている。地球全体の危機において、これまで抑圧され蔑まれ、保護の対象とみなされてきた先住民が、自らが救済のアクターとして自分たちの持続可能な文化や暮らしを実践し、主流社会に提示できることは喜ばしい。しかし、すでに世界各国の先住民のリーダーたちが、SDGs が先住民を置き去りにしていることを指摘している。われわれは、先住民がまたもや多数派にとって都合のよい存在へと書き換えられていることに注視し続けなければいけない。

池上嘉彦『記号論への招待』(1984年、岩波新書)の冒頭では、記号と符号が分けて紹介されている。例えば「回答は所定の欄に記号で記入せよ」と書いてある場合に、そこで使われている「記号」は本来、符号であり、他のものに代替可能である。一方で、符号でない記号には二つの側面があると池上は述べている。一つが「言語創造」、つまり人間が意味づけをする営みであり、それが人間の文化を生み出し維持し組み替えていくという側面で、もう一方が「言葉の牢獄」、つまりそういう記号ができることによって私たち自身が牢獄の中に入ってしまう側面である。

記号と符号に関する池上の示唆は先住民について考える上で重要である。それぞれの先住民間における場所や時間や状況や経験の違いについて十分に考慮せずに、先住民という [ A ] によって彼ら・彼女らについての記述や議論を行うことは一人ひとりの傷や経験を代替可能なものとして顔や声を非人称化させることにもつながるかもしれない。政治経済的な場面で、人種資本としての「先住民」という記号の商品価値が高まる中で、いかに言葉の牢獄となることを避けながら先住民という [ B ] が言語創造の契機を得るのかについて模索することが、われわれが目指すべき道筋である。

日本において「先住民と共生」という問題を考える時の最近の象徴的な出来事というのは、やはり民族共生象徴空間(通称ウポポイ)だろう。内閣官房アイヌ総合政策室のホームページでは、以下のように書かれている。

象徴空間は、長い歴史と自然の中で培われてきたアイヌの文化を多角的に伝承・共有すること、アイヌの人々の心のよりどころとなること、国民全体が互いに尊重し共生する社会のシンボルとなること、国内外の人々、子供から大人までの幅広い世代がアイヌの世界観、自然観等を学ぶことができるような機能を有する空間を目指します。

ここでは、先住民という存在が日本国全土にわたって共生を体現するものとして描かれていることに注目しよう。世界的な流れにおいても、資源管理や環境危機において先住民の伝統的な知識を生かしていこうという試みが、様々な地域で確認できる。このような状況について批判的な見解を述べることは簡単であるが、ポジティブな側面があることも見落としてはならない。北海道アイヌ協会設立時の立役者の一人であった小川佐助さん(1905年生まれ)の文章を紹介したい。小川さんは競馬の世界でもよく知られた人物で、テンポイントという競走馬を育てたことでも知られている。1948年に刊行された『北の光』というアイヌ協会の機関誌には次のように書かれている。

我々の孫の時代でも曾孫の時代でもよい、人種差別がなくなつて、社会的圧迫が無くなつたら、どれ程明朗でせう、我々の孫が曾孫が、学校へ行つて勉強するにも、どんなに楽しいこととせう、遠足の時でも修学旅行の時でも、仲良く仲間へ入れてもらえたら、どんなに楽しいこととせう、仕事だつて、明朗でさへあつたら、どんなに能率が上ることとせう、考えて見た丈けでも愉快ではありませんか。(『北の光』創刊号：10)

私が感慨深くこれを読むのは、1948年当時は、修学旅行に行っても楽しくない、仲間にも入れてもらえない、というように状況が深刻だったことに対して、近年はアイヌ文化に関するポジティブな発信や「ブーム」もあり、アイヌに対する負のイメージが変わりつつあるからである。限定的とはいえ、当時と比べればアイヌに対する社会的な理解が促進され、小川佐助さんが思い描いたような未来が今、現実のものになりつつあるのかもしれない点は重要である。若い世代がアイヌの出自を持つことを公にすることについても、以前よりもそのハードルは低くなっている。また、民族象徴空間、国立アイヌ民族博物館をはじめとする公的機関でアイヌの出自を持つ人びとが職に就き、アイヌの歴史や文化に関する専門家として活躍していることも重要である。「先住民」という記号に社会的な意義が付与されることは、批判的にみれば当事者が多数派にとって都合のよい人種資本とされ切り刻まれ先住権などを含む権利回復から疎外される側面がある一方で、(b) スティグマ化<sup>(注)</sup>された当事者にとっては暮らしや自己認識における傷や苦悩が社会的に改善される道筋ともなりうる。先住民をはじめとするマイノリティは文化資本から疎外されているため、経済的に困難であることが調査などで示されているし、そのような状況で自分たちの歴史や文化について十分に勉強する機会も奪われてきた。今まで以上にアイヌ民族の問題が可視化され、先住民として記号化されることが、それまで得ることができなかった様々な機会をアイヌの人びとに提供できた点は重要である。(c) ポジティブな側面とネガティブな側面のどちらか一方が

らのみ先住民の記号化という問題を捉えても、多くのことを見逃してしまう。今後われわれは、先住民が共生であれダイバーシティやSDGsであれ、主要登場人物として動員されることの可能性と問題点を、当事者の目線を含めながら議論を深める必要がある。

日本政府が掲げる「多文化共生推進プラン」（「地域における多文化共生推進プラン」…「多様性と包摂性のある社会の実現による『新たな日常』の構築」）は、基本的に外国人との多文化共生を射程としている。国内にいる、人種的に抑圧された集団、あるいは違うルーツを持つ他民族などは、上述の多文化共生プランには入っていない。

『多様性との対話 ダイバーシティ推進が見えなくするもの』（岩淵功一編、2021年、青弓社）では、ダイバーシティ推進に対して期待が述べられているとともに警鐘も鳴らされている。「様々な差異をもった人々の存在をこれまで以上に可視化しているし、差別・不平等に苦しむひとたちを力づけ、その解消に取り組む実践を伴っている場合もあるだろう」と評価される部分である一方で、「制度化・構造化された不平等、格差、差別の問題を後景に追いやり、その問題の解消に継続して取り組んでいく必要が見失われてしまいがちになる」ということに警鐘が鳴らされている。かつてテッサ・モーリス＝スズキが「コスメティック多文化主義」と正しく指摘したとおり、「うわべだけの」あるいは「見せかけの」多文化主義は3F——ファッション、フェスティバル、フード——にも象徴されている。

3Fのような、多数派にとって罪悪感や暮らしの変化を喚起させないうわべだけの多文化主義は、恐らく先住民やマイノリティ当事者にとっての一番深刻な問題に対してむしろ想像力を低下させてしまうだろう。

これらの問題を理解するための説明をみてみよう。英国ロンドン在住のアミナ・フォラリンは、「混同されがちな、BLMとダイバーシティ&インクルージョン」という記事でBLM（ブラックライブズマター）とダイバーシティの関係性を述べている。

ダイバーシティ&インクルージョン（包摂）は、もはや〔企業にとっては〕不可欠だ。（…）一方のBLMは、制度的な人種差別や不平等だ。これは具体的には、他の人種には与えられるさまざまな機会が、黒人には与えられずに排除されることを指す。（…）ダイバーシティ&インクルージョンとBLMの違いを理解するには、フロイド氏のことをもう一度考えてみるとよい。彼が亡くなったのは人種差別によるもので、近隣でダイバーシティが欠如していたからではない。

異なる文化を持つ人びとや多様性を理解しようということを意味するダイバーシティが、必ずしも人種差別の解消につながらない、という指摘である。アイヌを含めた日本における「人種的他者」にとって、最も深刻なことは殺害などの物理的暴力やインターネットのヘイトを含む排外主義的攻撃である。(d) フォラリンの指摘は、ダイバーシティ推進によって人種差別が解消されないという重要な指摘であり、この二つを混同することを避けることは、ダイバーシティ推進やSDGs時代において特に注意しなければいけない点だろう。

出典：石原真衣「先住民という記号ー日本のダイバーシティ推進における課題と展望」石原真衣編著『記号化される先住民／女性／子ども』（青土社，2022年）より抜粋。必要に応じて表現等を変えている。

(注) スティグマ化…偏見や差別に基づく負のイメージを負わされること

問1 下線部 (a) ダイバーシティとはどういうことを意味しているか。本文から30字以内で抜き出さない。

問2 本文中の [ A ] および [ B ] のそれぞれの空欄に最もよく当てはまる語句を本文から抜き出さない。

問3 下線部 (b) スティグマ化された当事者にとっては暮らしや自己認識における傷や苦悩が社会的に改善される道筋ともなりうるとあるが、どういうことか。本文にそくして100字以内で述べなさい。

問4 下線部 (c) ポジティブな側面とネガティブな側面のどちらか一方からのみ先住民の記号化という問題を捉えても、多くのことを見逃してしまうとあるが、ここでいうネガティブな側面の説明として適当でないものを下記からひとつ選び、番号で答えなさい。

- ①先住民がヘイトなどの排外主義的攻撃を受けること
- ②先住民が多数派にとって都合のよい存在へと置き換えられること
- ③先住民が権利回復から疎外されること
- ④構造的問題に目を向けないわべだけの多文化主義につながること

問5 筆者は、下線部 (d) フォラリンの指摘は、ダイバーシティ推進によって人種差別が解消されないという重要な指摘であり、この二つを混同することを避けることは、ダイバーシティ推進やSDGs時代において特に注意しなければいけない点だろうと述べている。この見解について、あなたはどうか考えるか。400字以内で述べなさい。

## 第2問

次の英文を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文中の\*は英文のあとに注があることを示している。)

著作権保護の観点から公開していません。

著作権保護の観点から公開していません。

[Adapted from “Illeism: The ancient trick to help you think more wisely”, by David Robson, BBC.com, 15 April 2023; <https://www.bbc.com/worklife/article/20230411-illeism-the-ancient-trick-to-help-you-think-more-wisely>]

注

third person 三人称 (he, she, it, they など表される)

first person 一人称 (I, we など表される)

Gallic War ガリア戦争 (ユリウス・カエサルがガリアを征服した戦争)

問1 下線部(1)は具体的にはどのようなことか。日本語で説明しなさい。

問2 下線部(2)は具体的にはどのようなものか。本文中から英語で抜き出しなさい。

問3 下線部(3)を日本語に訳しなさい。

問4 下線部(4)の実験手順を日本語で説明しなさい。

問5 The writer of the article talks about using “illeism” (thinking in the third person) as a helpful way to respond to daily stresses. What do you do when faced with a stressful situation? In English, describe something you regularly do to relieve stress and explain how it helps. Be sure to support your ideas with specific details and examples.

# 問 題 訂 正

広島市立大学一般選抜前期日程 国際学部【総合問題】

5 ページ

25 行目と 29 行目

(誤) …タイバーシティ

(正) …ダイバーシティ